

私立大学図書館協会

Japan Association of Private University Libraries

座談会 「大学図書館と危機管理－ふたつの大震災に学ぶ」



司会：石川 巧（私立大学図書館協会会長校 立教大学図書館長）

出席：東北学院大学 中川 清和氏（図書館長）

早坂 孝司氏（図書部図書情報課課長）

甲南大学 田中 雅博氏（図書館長 サイバーライブラリ所長）

山田 義人氏（図書館課長 サイバーライブラリ課長）

吉岡 知哉（立教大学総長）

阪神淡路大震災、東日本大震災で大学図書館が得た教訓を協会内で共有することを目的として、この座談会を企画しました。

阪神淡路大震災で甚大な被害を受けたのち、先進的な取り組みによって復旧を図ってきた甲南大学と、東日本大震災で大きな揺れを経験し、この間、着実に復旧への歩みを進めつつある東北学院大学から図書館長と職員の方をお招きし、私たちは二つの大震災から何を学び、どのような対策を講じながら今後に備えていかなければならないかを考えます。

■はじめに

石川 座談会に先立ち、立教大学の吉岡知哉総長にご挨拶をいただきたいと思います。座

談会にも最初の部分、参加いただきます。

吉岡 東北学院大学、甲南大学の皆様、本日はようこそ立教大学においでくださいました。



石川 巧 氏

2011年3月11日の東日本大震災から1年が経ちました。それから、ことしは阪神淡路大震災から17年目にあたります。東日本大震災の際は、東京でも大きな揺れがあり、本学の図書館でもたくさんの書籍が散乱して、後片付けに大変な手間がかかりました。東北地方の大学、それから阪神の大震災のときの関西の大学は、本学どころではなく、想像を絶する状況だっただろうと思います。

そうしたなかで、今回、痛感したことのひとつは、書物は「物」であるという単純な事実です。震災のとき第一に考えなければ

ならないのは、やはり人命であり、図書館内の安全確保ということだろうと思います。幸いなことに、本学では、図書館内で学生や教職員がケガをするということがありませんでしたが、他大学では固定式書棚などにも被害があったようで、もし多くの学生が利用している時期だったら、危険極まりなかったと思われます。こうした安全対策については、これからしっかり考えていかなければならないと思います。

東日本大震災から1年が経ったいま考えさせられるのは、復旧復興の過程で図書館が果たす役割というのはとても重要だということです。大学はもちろん、地域にとっても、図書館というのは非常にシンボリックな存在だと思います。今回の震災でも、被災した地域の図書館に、全国各地から書籍が寄せられるということがありました。本学は、以前から陸前高田市と関わりを持っているのですが、その陸前高田にもたくさんの書籍が寄贈されて小学校に集められています。本学では、司書課程の学生を中心としたボランティアが同市に参り、書籍の整理などをいたしました。そういう意味では、図書館の復興というのは、精神的な面も含めて、震災からの復興に対して非常に大きな役割を果たすのだろうと思います。



吉岡 知哉 氏

それからもう一つ、震災以降の図書館を考えると、書籍のデジタル化という問題も恐らく検討すべき課題になってくるのではないかと思います。さきほど、「物」としての書物と申し上げましたが、図書館のネットワークを考える際にもデジタル化の問題は避けることができないだろうと思います。そういうことも含めて、私たちは、今回の大震災の記憶をいかに蓄積・保存していくかという問題を真剣に考え、将来の図書館のあり方を検討していかなければならないと思います。

いま、立教大学は新しい図書館を建設中で2012年の秋に完成する予定です。収蔵可能冊数が200万冊、席数が1,500という、かなり大きな図書館になります。個人スペースのほかに、グループ学習ができるようなスペースをつくりますので、今後の安全対策、それから図書館のあり方を、きょうの話し合いからいろいろと学ばせていただければと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

石川 ありがとうございます。

第1テーマ

「阪神淡路大震災と東日本大震災、それぞれにおける図書館の被災状況」

■数字には表れない恐怖がそこにあった

石川 昨年3月11日に起こった東日本大震災を受け、私立大学図書館協会としては、大学図書館における危機管理と安全対策のあり方を検討し、広く情報を共有する必要があるという結論に至りました。本日は、1995年1月17日に起こった阪神淡路大震災で甚大な被害を受けたのち、先進的な取り組みによって復旧を図ってきた甲南大学、東日本大震災で大きな揺れを経験しながら、着実に復旧への歩みを進めておられる東北学院大学から図書館長さんをお招きしまして、私たちは2つの大震災から何を学び、どのような対策を講じて今後に備えていかなければならないのかということを考えてまいります。

まず、阪神淡路大震災と東日本大震災、それぞれにおける図書館の被災状況について伺います。数字的な部分はさまざまな報告書で確認することができますが、当事者の言葉として実態をお話いただけますでしょうか。

田中 甲南大学図書館長の田中です。17年前の阪神淡路大震災における本学図書館の被災状況についてご説明申し上げます。ただ、私自身は被災者ではございませんので、その点あらかじめお断りしておきます。



田中 雅博 氏

本学のキャンパスは大阪と神戸の間、神戸市東灘区岡本というところがございます。大学が設置されて61年、2012年現在で8学部、約9,500名の学生を有しています。震災当時は5学部、学生数は約1万名という状況でした。

阪神・淡路大震災が起こったのは、1995年（平成7年）1月17日火曜日、早朝5時46分でした。こちらの図（1）にありますピンク色のところが震度7という非常に強い揺れを記録した地点です。甲南大学キャンパスもその一帯に含まれております。

大学自体の建物の被害ですが、写真（1）にお示ししましたとおり、入り口の1号館の壁が落ちて悲惨な状況になってい

ます。財務部は窓枠がすべて外れてガラスが飛散し、天井も落下しました。右2枚の写真は理学部棟の内部の様子ですが、火災が発生し、あたかも爆撃を受けたように破壊されました。次の写真(2)は講義棟の入り口と掲示板前の様子です。建物を支える柱がつぶれてしまい、修復不可能な状態でした。2号館の壁もすべて落下し、大学全体の被害としては、本部を含む事務棟と講義棟の5棟が全壊。犠牲者となった学生は16名でした。

図書館は1978年建築の鉄筋コンクリート製です。建物の倒壊は免れましたが、全体的に大小の亀裂が生じたり、ガラス窓の破損が起こったり、サッシ枠のゆがみが起こったり、水道の配管が損傷する被害が多数生じています。写真(3・4・5・6)にありますように、1階、2階の書架はほとんど倒れ、3階、4階の書庫では中の本がほぼすべて落下しました。

1階は開架の閲覧室になっていますが、倒れた書架は本体がスチール製、側板と天板が木製です。アンカーボルトで床に固定されていたのですが、一部を除き、ボルトが床から抜けたり、スチールとの接合部が引きちぎれるなどして、16個全部が倒れてしまいました。図書6万冊はすべて落下、散乱しております。地震が東西ではなく南北に揺れたため、揺れた方向に対して弱い方向にあった新聞閲覧台も転倒しました。低層の雑誌架やカウンターは倒れにくい方向にあったので、転倒せずに残りました。オーディオコーナーの機器類も南北方向に置かれ、キャスターがついていたことが幸いしたのか、損傷はありませんでした。

2階には雑誌コーナー、参考図書コーナー、閲覧用カードボックス、事務室がございます。雑誌コーナーでは木製の雑誌用書架18個のうち15個が倒壊しました。それらの書架は複式書架で下が固定されていませんでした。単式の書架も簡単な床固定のみであったため、たくさん倒れております。こちらも雑誌はすべて落下、散乱していた状況です。参考図書コーナーにおいては床固定されていなかった複式低書架が全部、北向きに転倒しました。閲覧用カードボックスは倒れておりません。

事務室では、一部のカードボックスの上2段が向かい合っただけかみ合うように倒れ、重なっていたという報告を受けています。スチール製の書架やキャビネットも転倒していましたが、キャスターのついた机に置かれたパソコンとブックトラックに載せた図書は被害を免れています。

3階の書庫は床固定式のため、69列の積層式の書架自体にはほとんど損傷がありませんでした。中の図書につきましては、ほぼ100%落下しており、北側の壁には図書の衝突による無数のこすり傷や陥没跡が生じています。4階は階層が高かったこと、収納は大型の洋雑誌などが多かったことで、写真(5)のように、スチール製の棚板が折れ曲がった程度で済んだと思われます。

図書館は地下1階もございますが、床面に亀裂が入り、書架も転倒しております。蔵書のあまりない読書室や第2閲覧室は床面のクラックのみで、それ以外の被害は特にございませでした。

全体的な様子は以上です。

図 1



写真 1



写真 2



写真 3

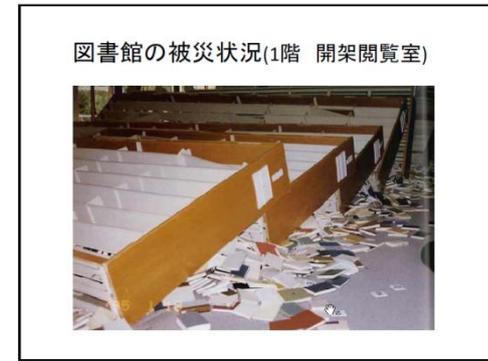


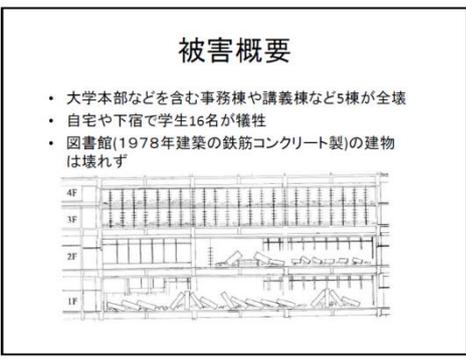
写真 4



写真 5



写真 6



石川 ありがとうございます。甲南大学では学生さんも数多くお亡くなりになったとのことで、深刻な被害をお受けになったことがよくわかりました。

続いて、東北学院大学の事例をお伺いします。

中川 東北学院大学図書館長の中川です。東北学院大学は3つのキャンパスからなっております。仙台駅のすぐ近くにある土樋キャンパス、地下鉄南北線の北の丘陵地に存在する泉キャンパス、津波でかなりの被害を受けた多賀城市にある多賀城キャンパスで、それぞれの距離が車で40分ぐらいという位置関係にあります。土樋キャンパスには文学部、経済学部等の文系5学部、多賀城キャンパスには工学部、泉キャンパスは1、2年生と教養学部という構成になっています。

今回の東日本大震災では、キャンパスの立地によって受けた被害がかなり異なりました(図2)。一番被害が大きかったのは、地面の隆起や陥没が起きた泉キャンパスです。造成地だったことが原因かと思われます。建物の被害は土樋キャンパスが顕著で、煙突に亀裂やひびが生じたため、撤去せざるを得ませんでした。津波が来た多賀城ですが、幸か不幸か津波による被害は受けませんでした。図書館としての被害が一番小さかったのも多賀城キャンパスです。多賀城キャンパスは津波の被害に遭われた方を受け入れる避難所としての活動で大きな働きをしなければならなかった現状がありました。



中川 清和 氏

図書館の具体的な被害状況ですが、本学全体での蔵書は120万冊ほど。土樋キャンパスにある中央図書館に約70万冊があり、そのうちの70%が落下しております。泉キャンパスは約30万冊で、やはり70%程度の落下。多賀城キャンパスは、15万冊程度なんですけど、落下はほぼありませんでした。ほぼ同じ地域に立地しながら、受けた被害の違いを見て、地盤の問題を強く感じました。

本学は30年ほど前の宮城県沖地震を経験しております。ここ10年のうちには約90%の確率で大きな地震が来るという予測が出ていましたので、震災対応として、図書館をはじめ大学本体も耐震化工事や、避難用具の備蓄等の準備を進めておりました。

写真(7・8・9)のとおり、書架そのものはそれほど倒壊しなかったのですが、本は著しく落ちております。落下防止バーを積極的に配置していた部分については、かなり効果がありました。書架は全部つないでおり、壁にも天井にもアンカーボルトを打ち込んで固定していましたが、落下防止バーが取り付けられた上の棚に大量の本が残ったため、上部に加わった振動が大きな揺れを生み、結果、壁からアンカーボルトを引き抜き、穴を開けるといった被害につながったようです。今後、落下防止バーの設置を考える上で考慮しなければいけない部分ではないかというのが私の個人的な感想です。

地下書庫は集密書架、移動書架を重点的に配置していました。見かけはそれほどひどく
 なかったのですが、当初は大丈夫だろうという判断をしていたのですが、あとで詳細に調査し
 たところ、書架そのものが浮き上がって下のレールを引きちぎっていたり、書架の背中部分
 にある本を押さえるバーがゆがんだりして、動かしようがなくなるという状況になって
 いました。

震災当日は春休み中ということもあり、学内にいる学生自体が少なく、図書館の利用者
 もごくわずかでした。図書館として第一にとった対応は、揺れがおさまった時点ではまだ
 電気が通っていたので、すぐに「安全を確保してください」という館内放送を行いました。
 その後、職員が手分けをして、特に閉架書庫等に入っている人の安全確認と避難誘導をし
 ました。退避に当たっては必要最小限のもの、貴重品だけをもち、それ以外はその場に置
 いて図書館から出るよう指導しています。その的確な指示が功を奏し、中央図書館内にい
 た職員、学生、利用者 20 名程度は、誰一人けがをすることなく安全に避難することができ
 ました。日ごろから地震を想定していたことで、迅速な行動を取ることができたのだと考
 えています。

図 2

写真 7

1. 東北学院大学図書館被災状況

③

1-2. 各館被災状況

館名	蔵書冊数	図書資料 傷下率 (%)	建物・設備の被害状況	蔵書の被害状況
中央図書館	約65万冊	約39万冊 (60%)	・ 壁面タイルの亀裂および一部脱落 ・ 壁面等に亀裂発生 ・ 車庫等階がコンクリート崩壊 ・ 車庫階(バス)コンクリート崩壊	蔵書の破損 中央図書館M3F・M4Fのス チール書架・緑書架・緑書架ポルト 破損(写真参照)
中央図書館分室	約7万冊	約4万冊 (60%)	・ 壁面タイルの亀裂および一部脱落 ・ 壁面等に亀裂発生	蔵書の破損
早キャンパス 図書館	約20万冊	約19万冊 (70%)	・ 壁面等に亀裂発生 ・ エントランスの崩壊 ・ 利用案内(バス)コンクリート崩壊	蔵書の破損
多賀城 キャンパス図書館	約15万冊	約1,500冊 (1%)	壁面等に亀裂発生	保存書架の一部破損

東北地区大学図書館協議会ホームページ「東北地方太平洋沖地震による東北地区大学図書館協議会
 加盟館被災状況」より (<http://www.library.tohoku.ac.jp/tohokuchiku/earthquake.pdf>)

1. 東北学院大学図書館被災状況

⑤

1-3. 3.11直後の館内の様子 (中央図書館)

<閉架書庫 (3・M3階)>



写真 8

写真 9

1. 東北学院大学図書館被災状況

⑥

1-3. 3.11直後の館内の様子 (中央図書館)

<閉架書庫 (4・M4階)>



左右の大きな揺れにより傾んだ配線バー

衝撃で折れ曲がったブックエンド

1. 東北学院大学図書館被災状況

④

1-3. 3.11直後の館内の様子 (中央図書館)

<開架閲覧室 (1-2階)>



カウンターを直撃した書棚

利用者は貴重品のみに持ち避難

石川 やはり宮城沖地震の教訓が対策に生かされたことが、被害を最小限に食いとめるのに大きな働きをしたわけですね。東京でも言えることなのですが、震度や揺れの大きさと被害の程度は必ずしも比例していません。むしろ地盤と建物の構造が大きな差を生んでいたようです。

ここで総長は退席されますのでコメントをいただければと思います。

吉岡 お話を伺い、あらためて利用者の安全確保の必要性を感じました。これは、図書館だけでなく大学全体のマネジメントの問題です。立教では地震の1ヶ月前に図上訓練を実施しましたが、今後は各大学において、学生も含めた訓練、防災対策が非常に重要になってくると思います。

第2テーマ

「大震災直後の対応、および、その後の復旧に関する時系列的な取り組み」

■マンパワーに支えられた復旧までの道のり

石川 続いて、大震災直後の対応と、その後の復旧に関する時系列的な取り組みについて、両大学からご報告いただきます。

田中 甲南大学では4つの鉄筋コンクリート棟と木造平屋建て1棟の、合わせて5棟が全壊しました。そちらを撤去してすぐに3棟を新築し、写真(10)のように、グラウンドに仮設のプレハブ校舎を設置して2年間、授業を行いました。

図書館が全館開館するまでの道のりですが、震災6日後の1月23日には、2階の事務室から復旧作業にとりかかりました。倒壊した書架の撤去、散乱した図書や書類の片付け、木製カードボックスの引き起こし。二次災害の危険性を伴う作業で難渋したと記録されていますが、これによって復旧の拠点ができ、以後の工程を速やかに進めることができました。

写真 10

プレハブ校舎



震災10日後の1月27日には、本学の学生に図書館を利用させていただけるよう、近隣の大学に依頼しております。関西大学、近畿大学、神戸学院大学の3校がご協力くださいました。その後、私立大学図書館協会京都地区協議会、大阪市立大学、大阪工業大学、摂南大学から、学生証の提示による図書館の利用許可のご案内をいただいております。

2月に入ってからは1階の開架閲覧室の再開を目指して、倒れていた書架の引き起こしを行い、雑誌や参考図書の片付け、書架の補修を開始しました。続いて3階の書庫内に散乱していた図書の配架にも着手しました。落下した本が腰から胸の高さまで積み上がり、作業は困難を極めたとのことですが、ボランティアや学生アルバイトの協力も得て約2カ月後の4月18日には一応のかたちに着いております。

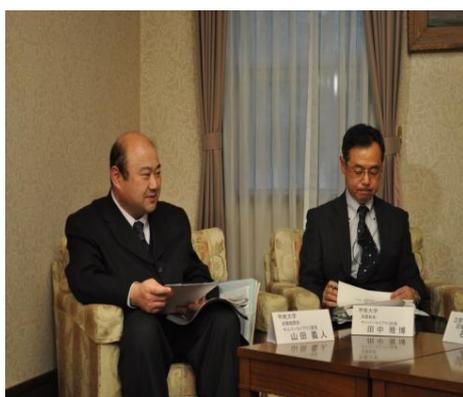
3月からは、学生ボランティアが中心となり、4階の書庫の散乱図書の配架を始めました。3月6日に図書の受入業務を再開し、3月17日から21日にかけて開架書庫への搬入と設置、耐震化工事を行いました。書架の復旧に当たっては、床固定の強化と、天井を4本の鋼材で連結して南北の振動に備えるとともに、書架の背に鋼板を張って書架自体がゆがまないように補強しております。

4月に入り、3日に地下の読書室を開放。13日には2階補修の準備を開始しております。17日に、図書館協会へ館員被害状況調査の協力依頼をしました。

5月になって、2階にあった参考図書の書架、雑誌架、カードボックスを地階へ搬出し、2階の補修と耐震化工事を行いました。30日にはすべてが完了し、書籍の配架を行って、6月1日によりやく全館の開館にこぎ着けております。

以上、図書館の館員等が相当苦労して作業に携わった結果、4カ月強の期間で再開を成し遂げることができました。蔵書の被害ですが、貸出中のまま行方不明になった図書が95冊、地震に起因すると思われる未返却本が300冊以上、館内での落下による破損が数百冊という数字が記録されております。

山田 現場の作業責任者からは、補修の際、図書をいったん別の場所へ搬出し、工事が終了したあと搬入するという作業が思いのほか重労働であったという報告を受けていますが、学生ボランティアが大変大きな力となりました。



山田 義人 氏

もともと甲南大学には自治会という組織があり、入学試験時のアルバイトの募集を行うなどしておりまして、学生の協力を得やすい環境がありました。震災後も自治会を通して学生ボランティアを募った結果、スムーズに必要な人手を確保することができました。本学には、2010年度から始まった学生による学生支援ボランティアのピア・サポートという

制度があります。今後はこちらをボランティアの窓口として積極的に活用することを考えております。

中川 東北学院大学では、震災の当日、すぐに仙台駅近くの土樋キャンパスに全学的な災害対策本部が置かれました。図書館も含め、以後、すべての復旧活動はこちらからの指導

に従って進められました。

3月12日から10日間程度は、余震が続いて建物に入れない状況でした。建物診断をして安全性を確認するまでは立ち入り禁止措置がとられていたのです。被害状況の調査に着手したのが3月22日、全体の把握には1週間ほどかかりました。

図書館では、復旧作業を開始してよいという許可が出た24日、ただちに落下した図書を戻すことから始めました。書架そのものは破損がそれほどひどくないだろうという判断のもと、斜めになっていない棚には図書をどんどん戻し入れ、作業はかなり順調に進みました。ところがその後、4月7日にマグニチュード7.5の最大余震が発生し、せっかく戻した図書がほとんど落下してしまいました。賽の河原で石積みをする心境と申しましょうか、精神的にはかなりダメージを受けました。翌日からは再度、図書館内への立ち入りが禁止となり、まずは建物の安全確認を最優先にということで、実質的な復旧作業が始まったのは4月半ばになってからのことでした。

大学全体として建物の壁やタイルに剥落などがあり、大規模な補修工事が必要でした。卒業式はもちろん、入学式も中止にせざるを得なかったのですが、5月9日に授業を開始するという決定がなされたので、図書館としても、全面復旧は不可能ですが、それまでに利用環境を少しでも整え、新学期が始まったときに学生が利用できるような状況にしようと各キャンパスで最大限の努力を始めました。

詳細な調査を行った結果、実は、当初あまり被害を受けていないと思っていた書架そのものがかなり傷んでいることがわかりました。このまま本を戻しても、余震が来ればまた、あるいは以前よりひどい状況になるかもしれません。特に泉キャンパスの場合は、木製書架がほぼ倒壊寸前と言ってもいいほどの損傷でした。根本からの工事が必要との判断がくだり、2、3週間かけて書架に載っている本をすべて外へ搬出しました。重労働ではありましたが、本学でも学生ボランティアが大活躍しました。

泉キャンパスでは安全面を考慮し、4月になっても学生を入れない措置をとっていましたが、細心の注意を払う代わりに特別な許可を得て、学生ボランティアの入構を認めていただいたのです。主に図書館内部に散乱した図書を別の場所に移動させ、復旧作業をスムーズに進めるための下準備をしていただきました。かなりの効果がありましたね。これと並行して、本学では図書館職員の大半が委託の方なのですが、その派遣先のほうが人を集めてくださり、臨時に支援に入っただけという心強い援助も受けることができました。

本をすべて運び出したあとで書架を全部組み直し、筋交いを入れたり、もう一度アンカーボルトを打ち直したりと入念な補強を行いました。工事には半月近くを要しましたが、



早坂 孝司 氏

安全を第一に考えての環境整備ですので、妥協するわけにはまいりませんでした。

この時点で開館目標の5月を迎えていました。開架部分だけはなんとか使える状況にして、利用者へ本の提供はしました。ただし、職員も復旧作業と並行しての業務遂行でしたので、貸出や閲覧時間は短縮しなければなりませんでした。職員の方には、キャンパス間で移動をして作業に当たっていただきました。例えば、比較的軽い被害で済んだ多賀城の職員には、そちらでの仕事を短縮してもらい、その時間を中央図書館や泉図書館への応援に充てていただきました。勤務時間を変則的にして、少ない労力を集中的に作業へ向けた対応をとったことで、迅速な復旧がかなったものと考えております。

6月27日からは、外部支援の1つとして、saveMLAKという組織にご協力をいただきました。こちらは大学に限らず、広く国公市立の図書館職員経験者の方々が構成されるボランティア組織です。専門知識を生かし、配架等について大きな力を果たしていただきました。

もう一つ、国立国会図書館からもご支援をいただきました。本学だけではなく、県の図書館、公立図書館、そのほかの大学図書館でも蔵書にかなりの破損が出ておりましたが、書籍の修復をレクチャーする講習会を開いていただいたのです。こちらも効果は絶大で、本学でも、教えていただいた技術を使って、軽微な破損であれば自分たちで修復することができました。

復旧までには、従事した方々に大変なご負担をおかけしましたが、一丸となって作業を進めた結果、震災から半年後の9月、夏休み明けから平常の運営に戻すことができました。皆さまのご尽力に感謝しております。

早坂 書架にあった本は地震を受けてほとんど床に落ちていたのですが、落下防止バーが設置された上3段には残っている図書が多くありました。まずそれらの本をおろさなければ書架の復旧には入れないというのには辟易いたしました。対策を講じる場合は、見目が少々無骨であっても、鋼材は厚めの丈夫なものを使うに越したことはないと感じております。

書架を復旧する際には、書架を設置した業者の方に作業を依頼できたことが大きかったです。業者さんのほうで詳細な図面を持っておられましたし、部材も保存している割合が多かったので、復旧作業の短縮につながりました。(写真11・12・13・14・15・16)

写真 11



写真 12



写真 13



写真 14



写真 15



写真 16



■デジタルに頼らない通信手段が予想外の力となった

石川 東北学院大学さんでは、限られたヒューマンリソースを効率よく重点配備して作業に当たられたとのことですが、今回、携帯電話も含め、初期の段階では通信がほぼできない状態が続きました。どうかたちで職員同士の連絡を取り合われたのでしょうか。

中川 携帯電話はほとんどつながりませんでした。3キャンパスのうち、対策本部が置かれた土樋キャンパスだけは電気の復旧が早かったんですね。情報処理センターも機能していましたので、通電してすぐに業務を再開できました。ホームページを通じての連絡が一番効果的でしたね。通信手段は基本的にそれだけです。あとは職員が大学へ自主的に出てきてくれたのが大きかったです。こちらから連絡しなくても、それぞれが移動可能なキャンパスへ出向き必要な情報を得て、お互いにじかで交換し合うというアナログな手段が非常に役に立ちました。マンパワーのありがたみをあらためて痛感いたしました。

石川 現在、図書館の業務は、専任だけでなく派遣や委託スタッフとともに運営している

大学が多いと思います。復旧作業にあたっては、専任スタッフと派遣、委託スタッフの間でどのように連携をされたのでしょうか。

中川 私どもは災害などに備えた緊急時対応マニュアルというものを長年にわたって作成しておりました。図書館業務を外部へ委託した際、連携を想定した改定版を出して、いざというときに意思疎通ができる体制を準備していました。

田中 非常事態における対応策として、外部の方には、図書館本部との連絡網をお伝えしております。

震災直後からの取り組みですが、学内に防災センターという拠点をつくり、防災訓練も本番に近いようなかたちで行っていこうと考えております。訓練にはもちろん外部の方にも参加していただきます。そこから得た経験を蓄積し、大学全体として必要な対策を講じていこうという状況です。

■被災して初めて見えてきた諸課題

石川 当時を振り返ってみて、「こうしておけば良かった」とお気づきになった点や、「こういうことができなかった」という反省はございますか。

山田 ヘルメットと軍手は全教職員に配布しなければならないということを身に染みて強く感じました。現場で作業する方の安全を守るために最低限必要な装備です。現在、既に全教職員への配布が終わっており、それぞれが自分のものを常備しています。

本学は図書館が地域の方の避難場所になりました。震災後は東灘区と連携して、常時2,000人分相当の飲料水と食事と毛布といった災害時必要物資を備蓄しておく取り組みを進めています。同時に、図書館の地下に貯水タンクを設け、常に300トンぐらいの水を確保しておけるような設備を構築しております。

中川 やはり非常時には通常的意思決定システムがほとんど役に立たないものだと実感いたしました。図書館の復旧に当たっても、通常の手続きを踏んでいてはがちが明かないということで、現場の判断でどんどん決定を下していったという経緯があります。非常時には何を優先すべきか、順位の明確化は徹底しておくべきだと考えます。

早坂 私が一番、必要性を感じたのは、閉架書庫に入っている学生の人数を把握しておくことです。学生の避難誘導をする際には館内放送に加え、ハンドマイクも使いましたが、書庫内には聞こえない場合もあるでしょう。難しいかもしれませんが、中に何人いるのか、おおよその数でもつかんでおくことが大切です。

第3テーマ

「安全対策、震災マニュアル作成などの取組み」

■得た教訓を風化させないための努力こそが最大の防災対策

石川 天災はいつ起こるかわかりません。今後にも備えるためにも、我々ほどのような安全対策を講じたらよいのでしょうか。震災マニュアルの作成も含め、それぞれの大学の取組みをお聞かせください。

中川 3・11の大震災のあと、大学としても、学生や教職員の安全をいかに確保するかということについて、抜本的な見直しがされています。例えば、各講義室の教卓の上に地震が起きたときの避難手順を記したマニュアルを設置するようにしました。教員は、そちらを開けばすぐに学生へ適切な指示ができるというわけです。全館放送を通じての避難誘導についても、手順が一目でわかるような工夫をしています。

防災訓練は以前から行っていましたが、今年度よりオリエンテーションの期間中、キャンパスの地理に不慣れな新生を対象に、震災が起こったことを想定した避難訓練を実施しています。

図書館では、独自に危機管理マニュアルの改善をしております。去年9月から、近隣の地域の方々も自由にお使いいただけるよう、図書館の地域開放を始めましたので、危機の際にはそういった方々の安全確保も課題になってくるわけですね。いかに安全かつ迅速に避難の誘導をするかといったことも定めております。このマニュアルを、委託職員も含めて図書館で共有するようにしました。

施設上の問題として、まず物が落ちないことが大事なので、すべての書架で落下防止バーの取り付けを進めております。同時に、書架自体の強化ですね。床と天井と壁にしっかりと固定し、なるべくゆがみが出ないようなかたちで設置しています。

今回の震災に関しては多数の出版物が出されております。震災を直接受けた大学図書館として、そういった書籍の収集を現在、集中的に行っています。

東北学院大学の3キャンパス、卒業生も含めて、中学校、高等学校、幼稚園での記録を本格的に収集し、整理する事業にも着手し始めました。震災から得た教訓を財産として残すべく、100年後の人たちに向けてることを念頭に置いたアーカイブ作成を進めています。来年の3月には、一定の報告書を発行できる段階になればと考えております。

早坂 安全対策は、講じて終わりではなく、日ごろから点検しておくことが重要です。例えば、防災備品の個数や設置されている場所を再確認したり、書架の固定状況のチェックですね。固定されている壁は弱くないか、打ち込んだボルトがゆるんでいないかということは定期的に見回るようにしております。

山田 甲南大学の図書館でも、写真（17）でご覧いただけるように、柱の部分にコンクリートを打って強度を高めています。四隅以外の部分でもこのような補強強化を行いました。

書架の転倒防止対策としては、写真（18）にありますとおり、書架同士をつないだり、鉄板を入れたり、壁面にフックのようなものをかけて、揺れに少しでも耐え得るような補強をしています。

この写真（19）は震災後に新しくつくった語学を学べる部屋ですけれども、窓を狭くしてゆがみを生じさせないようにしたり、天井まである書架を備え付けたりというかたちで強化を進めてきております。

学内では、サーバー室などの情報機器類の安全対策に重点を置いています。寒さ対策として、ストーブや湯わかし器を各所に設置しました。消防用設備等の安全確認と点検の実施を定期的に行い、緊急地震速報システムをすべての施設に配備しています。

写真（20）は、左側が図書館です。その右隣に防災センターを設置し、施設に関する情報はこちらで一元化するようにしています。有事の際にはこちらが対策本部となります。

防災マニュアルは現在、準備中です。医療、交通、ライフライン、気象といった情報が入手できる先を一覧表にしておき、いつでも使えるようにしておくことが肝要と考えています。応急の救護、初期消火、避難誘導などについても、職員一人一人が熟知しておくことが重要です。

図書館としましては、あくまでも人命の保護が最優先です。次いで図書資産の保全と業務の早期復旧を図るという方針でおります。

写真 17



写真 18



写真 19



写真 20



■天災は防げないが、人災をゼロにすることはできる

石川 阪神淡路大震災が起きたのは明け方の5時台、3・11の東日本大震災は14時台に発生しましたが、ほとんどの大学が春休みに入っており、学生さんがあまりいない時期、時間帯でした。その意味で、我々はまだ、学生が図書館の中にたくさんいて利用している状況の中での震災を経験したことがないんですね。私が強く懸念しているのは、利用者でいっぱい図書館で震災が起きたときのパニックをどう收拾するかということです。小さな不安が全体に大きな混乱を引き起こしかねませんから、いかに素早く的確に避難誘導をするかということが課題の一つとして挙げられると思います。そのあたりの取り組みはいかがですか。

山田 図書館が満員の状態で震災が起きた場合、どうなるか。以前、間違いで避難速報が流れたことがあったのですが、館内の学生数が非常に少なかったので混乱をきたすということはありませんでした。満員状態での状況については想像するしかありません。机上でしか検討できないのが実際だと思いますが、月に一度、必ず業務委託者と定例会を開いています。そういった場で連携強化ということを常に意識しながら、お互いに知恵を出し合っていかなる事態にも対応できる備えをしておきたいと思っています。

中川 図書館が学生でいっぱいの状況というのはなかなか想定しがたいのですが、可能な限り落ち着いて行動するように求めるしかないでしょうね。僕は震災発生時、100人以上の人間と1つの会議室の中にいましたが、そちらでの状況を見ると、パニックに陥るといったよりは、みんなどうしていいのかわからなくて立ちつくすといった感じでした。そのときの経験から、適切な誘導があれば、100名程度なら避難場所への誘導はさほど難しいことではないと考えています。まず、身の安全を確保することを優先させる。揺れがおさまってから、適切な場所に避難誘導するということで対応は可能だという気がします。

田中 マニュアルはもちろん必要ですが、いざというときに、探さなければならないとか、読むのが非常に大変では置いておく意味がないと思うんですね。甲南大学が経験した阪神淡路大震災のような非常に強い揺れの場合、その場にいる学生を安全に逃がすことが第一だと思うんです。そのために図書館ができることは、とにかく倒れにくい書庫をつくること。そして、逃げるための通路を確保すること。マニュアルをつくる以前に、まずそういったことを考えて、館内のものの配置や、書庫の取り付けについて十分な配慮をしておく必要があると感じています。

石川 備えあれば憂いなしということで、我々は「対策」というと、ついマニュアルの作成に力を入れてしまいがちです。もちろんそれは非常に重要なことではありますが、命に関わる震災が起こったときには、とにかく逃げるための方法を確保することが最優先だと

いう両校からのご意見、実際に体験した者でなければ出てこない深い言葉だと受けとめております。

皆様方のお言葉を踏まえ、私立大学図書館協会としては、今後も、横断的に共有すべき情報を集約していくことが大切だと考えております。本日はどうもありがとうございました。

了

参考資料

- [1. 「東日本大震災からの復旧～東北学院大学図書館の事例～」](#)
- [2. 「阪神淡路大震災からの復旧～甲南大学図書館の事例～」](#)